

# 前1千年紀前半の北西セム諸語における 不定詞絶対形の同語反復的用法

竹内 茂夫<sup>†</sup>

キーワード：北西セム語、不定詞絶対形、同語反復的用法、Garr (1985)

## 1 はじめに

本稿は、Garr (1985) に挙げられている不定詞絶対形の用例に加えて、Garr が扱っていない用法を検討の上、それを等語線の再画定のために追加すべきであることを提案したい。

本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)の研究課題「前2-1千年紀における北西セム語の等語線の再画定：GISによる言語地理学的研究」(研究代表者：池田潤)(平成18～21年度)の一部を成すものである。

## 2 Garr (1985) における不定詞絶対形の用法

セム語のうち、北西セム語においては、一般に2種類の不定詞、すなわち不定詞構成形(the infinitive construct)と不定詞絶対形(the infinitive absolute。例文では「InfAbs」)が区別されている。不定詞構成形は近代欧州諸語における不定詞に対応していると言うことができる一方で(Joüon - Muraoka 2006:401)、不定詞絶対形は異なった振る舞いをする。

第1に、動詞として用いられる場合には、命令を表すものとして次のような例が見られる。母音が記されており語形がある程度特定されている聖書ヘブライ語から用例を挙げ、私訳を付ける(「OBJ」は目的語の標識

---

<sup>†</sup> 京都産業大学文化学部

の意)。

- (1) zākôr                    'et-yôm    haš-šabbāt lə-qaddəš-ô (出エジプト記 20.8)  
remember(InfAbs) OBJ-day of the-sabbath to-consecrate-him  
「安息日を聖なるものとするべく覚える！」

定動詞として用いられているとされる用例として、次のような例が見られる。

- (2) wə-kārôt            'imm-ô    hab-bəřîf (ネヘミヤ記 9.8)  
&-cut(InfAbs) with-him the-covenant  
「そして彼と契約を結ぶ」

を挙げることができる。

第2に、名詞としてより多く見られる用法は定動詞の前後に現れるもので、多くの場合定動詞と同じ語根を持ち、何らかのモダリティを加えるものであるとされる<sup>1</sup>。

- (3) môt                    tāmût (創世記 2.17)  
die(InfAbs) you die  
「おまえは死ぬのだ」

聖書ヘブライ語を除く前1千年紀前半におけるシリア・パレスチナの言語特徴の言語地理学的研究を行った Garr (1985) では、不定詞絶対形の用法として例(1)のような命令形としての不定詞 (§4:7a) と、例2のような定動詞としての不定詞 (§4:7c)<sup>2</sup> が挙げられている。これらの用法については、表1のようにまとめられている (Garr 1985:213-14 より関係箇所を翻訳抜粋)。

<sup>1</sup> この用法の統語的な位置づけとして、動詞の内的目的語の対格 (an accusative of the internal object) (例えば Joüon - Muraoka 2006:391) あるいは独立の補語 (absolute complement) (例えば Waltke and O'Connor 1990:584) といった見解が見られるが、別途議論が必要であろう。

<sup>2</sup> 物語の過去時制 (§4.8) として標準フェニキア語の例が挙げられているが、4:7c に含めることができると思われるので割愛した。

表 1: Garr (1985:213-14) による不定詞絶対形の用法一覧

	ビ ブ ロ ス	標 準 フ ェ ニ キ ア	ア ラ ム	サ ム ア ル	ア ン モ ン	デ イル ・ ア ツ ラ	モ ア ブ	エ ド ム	ヘ ブ ラ イ
(4.7a) 不定詞： 命令形として	yes	?	no	no?		yes?	no		yes
(4.7c) 不定詞： 定動詞として		yes	no	no		no	no		no

### 3 不定詞絶対形の同語反復的用法

不定詞絶対形には、Garr (1985) が取り上げた上述の用法の他に、定動詞の前後に現れて定動詞と同じ語根もしくは似た意味の語根を持つ、同語反復的用法とも言える不定詞絶対形が見られる<sup>3</sup>。聖書ヘブライ語では、例(3)で挙げたようによく見られる。

この用法について Garr では論じられていないので、以下では Garr が挙げている各言語や方言において、この同語反復的用法の用例を検討していきたい。なお、この用法がどのような機能を果たしているかについては別の機会に論じたいと考えており、私訳を挙げるにとどめておきたい。

まず、フェニキア語の古いビブロス方言の 'zrb'l<sup>4</sup> 碑文(前 10 世紀)<sup>5</sup> に 1 例見られる。テキストの箇所としては、原則として Donner and Röllig (1964) の KAI のテキスト番号と行数を示す(数字単独の場合はページ数を表す)。

<sup>3</sup>これは、the internal object accusative, the absolute complement, the intensifying infinitive, the tautological infinitive など、様々な用語で呼ばれている (Williams 2007:85)。

<sup>4</sup>'zrb'l の読み方として、オゼルバアル (Οζερβαλος) (KAI 5, Friedrich and Röllig 1999:26, Krahmalkov 2000:364)、アザルバアル (Azarbaal) (Gibson 1982:8,9,11)、アズルバアル ('Azru-Ba'l) (Friedrich and Röllig 1999:26,53)、('Azru-Ba'al) (Krahmalkov 2000:364) などが見られる。

<sup>5</sup>前 11 世紀中期とする見解もある (Gibson 1982:9)。

- (4) 'm nhl                    tnhl (KAI 3.3-4)  
 if possess(InfAbs) you possess  
 「もしおまえが所有するのなら」

次に、標準フェニキア語においてはシドンの王タブニート (tnbt)<sup>6</sup> 墓碑 (前 6 世紀末期)<sup>7</sup> に 2 例見られる。

- (5) w-'m pth                    tpth            'lt-y    w-rgz                    trgz-n (KAI 13.6-7)  
 &-if open(InfAbs) you open OBJ-it &-disturb(InfAbs) you disturb-me  
 「もしおまえたちがそれを開け、そして私を邪魔するのなら」

アラム語ではその膨大な資料にも関わらずこの用法は極めて少なく、初期のスフィレ碑文およびネーラブ碑文にわずかに見られるのみで (Segert 1990:390)、より後のエジプト・アラム語や聖書アラム語には見られない。

スフィレ碑文 (前 8 世紀中頃) の中の 1 つの碑文において (KAI 224)、次の 4 例が指摘されている。

- (6) hskr                    thskr-hm                    b-yd-y (KAI 224.2)  
 surrender(InfAbs) you surrender-them in-hands-my  
 「おまえたちは彼らを私の手に渡すのだ」

- (7) rqh                    trq-hm (KAI 224.6)  
 placate(InfAbs) you placate-them  
 「おまえは彼らをなだめるのだ」

- (8) nkh                    tpw-h                    b-ḥrb (KAI 224.12-13)  
 strike(InfAbs) you strike-it with-sword  
 「おまえは剣でそれを打つのだ」

この例では、不定詞絶対形とされる *nkh* と定動詞の *tpwh* では語根の子音

<sup>6</sup>一般的にはタブニート (Tabnit) と転写されるが、Krahmalkov (2000:487) では TIBNĪT と転写されている。

<sup>7</sup>前 5 世紀前半という見解もある (Gibson 1982:101-102、McCarter 2000a:181,182)。

が異なることに注目されたい<sup>8</sup>。その直後に、定動詞と同じ語根を使った不定詞絶対形の例が見られる。

(9) *nkh tkw-h ... (KAI 224:13)*

strike(InfAbs) you strike-him ...

「おまえは彼... を打つのだ」

ネーラブ碑文 (前 7 世紀) の中の 1 つの碑文において (KAI 226)、次の 1 例が指摘されている。

(10) *hwm 'thmw (KAI 226.6)*

(InfAbs) they

「そして彼らは取り乱したのだ」

しかしながら、*hwm* は名詞であって不定詞絶対形ではないのではないかとする立場もある (Gibson 1975:98、McCarter 2000b:185)。

サムアル方言 (前 8 世紀) では、この用法は現存の資料のうちには見られない (Tropper 1993:237)。

アンモン語では、城塞碑文 (前 9 世紀) において次の用例が指摘されている。

(11) *mt ymtn (Citadel 2)*

die(InfAbs) they die

「彼らは死ぬのだ」

(12) *jkhd 'khd (Citadel 3)*

destroy(InfAbs) I destroy

「私は滅ぼすのだ」

例 (12) は、定動詞の前に現れている同じ語根の語の最初が欠けているとはいえ、不定詞絶対形であろうと考えられている (Jackson 1983:10、cf. 17、Schüle 2000:89、Aufrecht 2000:139)

<sup>8</sup>*ipwh* は「打つ」という意味では一致しているようであるが、形態素の分析や語根の認定に関しては、KAI 269、Gibson 1975:54などを参照されたい。

デイル・アッラ出土のテキスト (前 800 年頃) においては、この用法で用いられる不定詞絶対形がいくつか指摘されているけれども、研究者によって不定詞絶対形と解釈するかどうかは異なる。

- (13) w-bkh.                    ybkh (KAI 312.I.3-4)  
       &-weep(InfAbs) he wept  
       「そして彼は泣いたのだ」

この箇所の *bkh* に関しては、現在は不定詞絶対形と解釈されているようである<sup>9</sup> (Müller 1991:18, Weippert 1991:156, Levine 2000:142, Schniedewind 2005<sup>10</sup>)。

- (14) ḥšb.    ḥšb.    w-ḥšb.    ḥ[šb] (KAI 312.I.12-13)

この箇所に現れる *ḥšb* については、様々な見解が見られる。Hoftijzer and van der Kooij (1976:216) では完了形もしくはより好ましいとして命令形の繰り返しと捉え (“consider, consider; consider, con(sider) [sic!]”, Smelik (1991:84) は命令形の連続として捉えているけれども (“Take heed, take heed, and take heed ...”), Müller (1991:18) („bedenkt ein Bedenken“ oder „plant einen Plan.“) および Schüle (2000:89) („Bedenke/plane genau und plane [wohl].“) は命令として使われる不定詞絶対形と同族目的語の組み合わせと捉え、Schniedewind (2005) では “He thought and thought, mulling his thoughts” のように過去形動詞の反復に加えて過去形動詞と同族目的語の組み合わせで訳している。一方で、Levine (2000:142, 143n21) ではすべて名詞として訳されている (“One augurer after another, and yet another. As one augurer”)。以上のように、一致した解釈があるとは言えないようである。

- (15) l-    qb.                                    nqb (Deir ‘Alla IX.3a)  
       not curse(InfAbs)    (下記参照)

<sup>9</sup>1976 年の editio princeps では、不定詞絶対形とされる語形に関して、テキストそのものが *ḥzjh. ybkh* “[why does] see|r weep” のように違う語根の語として読まれており、後続する動詞 *ybkh* “he weeps/wept” の不定詞絶対形とは考えられていなかったようである (Hoftijzer and van der Kooij 1976:173)。

<sup>10</sup>KAI 312 という番号は Donner and Röllig (1964) にはなく、Schniedewind (2005) に基づく。

この箇所については、Hoftijzer and van der Kooij (1976:262) が不定詞絶対形と解釈しているけれども、テキストの訳 (“he is not cursed (or: we will not curse, or: we will not be cursed, or one of these clauses in question form)” には反映されていないようである (Hoftijzer and van der Kooij 1976:182、Müller 1991:18)。Levine (2000:140-145) や Schniedewind (2005) ではこの箇所自体が訳されていないようである。

モアブ語ではメシャ碑文(前9世紀中頃)に1例見られるとされている。

(16) w-yšr'l 'bd 'bd 'lm (KAI 181.7)

&-Israel perish(InfAbs) he perish ever

「そしてイスラエルは永遠に滅びたのだ」

しかしながら、この構文の最初の 'bd を不定詞絶対形とし第2の 'bd を定動詞と解釈する立場がある一方で (Andersen 1966:99、KAI 173、Gibson 1971:78、Schüle 2000:89)、最初の 'bd を定動詞として2番目の 'bd を同族目的語で後続の名詞 'lm 「永遠」に修飾された語であると解釈する意見が見られたり (Andersen 1966:99、Niccacci 1994:228)、定動詞の繰り返しと解釈しているような訳が行われているものもある (“and Israel has gone to ruin, yes, it has gone to ruin for ever!”) (Smelik 1991:33、2000:137)<sup>11</sup>。

エドム語の資料では、この用例については報告されていないようである。

ヘブライ語碑文資料においては、同語反復的不定詞絶対形の用例が多く見られる聖書ヘブライ語と異なり、ムラッバアト出土のパピルス第17番(前8世紀後期-前7世紀初期)において次の1例のみが報告されている。

(17) [š]lh šlht 't šlm byt-k (Murabba'at Papyrus 17a.1)

send(InfAbs) I send OBJ peace house-your

「私はあなたの家に安否(の挨拶)を送るのである」

問題の語 ([š]lh) には欠けが見られるけれども、不定詞絶対形と考えられている (Gogel 1998:105-6,106n77,271、Schüle 2000:89)。

<sup>11</sup>最近の van der Steen and Smelik (2007) には言及されていない。

#### 4 同語反復不定詞絶対形の分布と Garr 1985 との比較

先の第 3 章で行った不定詞絶対形の同語反復的用法の考察をまとめ、表 1 に追加すると表 2 の通りになる。

表 2: 表 1 に同語反復的不定詞絶対形の用法を加え修正したもの

	ビブロス	標準フェニキア	アラム	サムアル	アンモン	デイル・アッラ	モアブ	エドム	ヘブライ
(4.7a) 不定詞: 命令形として	<u>no</u>	?	no	no?		yes?	no		yes
(4.7c) 不定詞: 定動詞として		yes	no	no		no	no		<u>no?</u>
同語反復的	yes	yes	yes		yes	yes	yes?		yes

前 1 千年紀前半の北西セム諸語において不定詞絶対形の同語反復的用法が見られるとされる言語は、フェニキア語のビブロス方言、標準フェニキア語、初期のアラム語、アンモン語、デイル・アッラの言語、そしてヘブライ語であり、モアブ語ではこの用法が見られるかどうかについては意見が分かれている。

地理的な観点からは、アラム語で見られるスフィレ碑文とネーラブ碑文は近接しており、フェニキア語のビブロス方言と標準フェニキア語の例として現れるシドンも近くであり、デイル・アッラ、アンモン語、ヘブライ語のムラッバアト（およびもしモアブ語を入れたとしても）は近接しているという地域的な偏りが見られる。

Garr (1985) が取り上げていた不定詞絶対形の用法は、まず命令形として用いられる場合で、それはわずかにヘブライ語（あるいはデイル・アッラも？）に見られるのみである。ただし、表 1 のように、ビブロス方言で“yes”となっているのは不定詞絶対形ではなく不定詞構成形 (*ld'v* “attention, know!”) によるものなので、不定詞絶対形の用例に限定しているここでは



“no” としなければならない。

また、定動詞として用いられるのは標準フェニキア語のごくわずか(しかも「中央」ではないカラテペのアザティワダ碑文。KAI 26.A および C、Gibson 1982:56 以降。竹内 2006 も参照)に過ぎないけれども、Garr が“no”としている(碑文)ヘブライ語の用例 *w-'sm* “and store” (メツアド・ハッシャヴヤフ 1.5。KAI 200.5、Gibson 1971:29) については様々な議論があり (Gogel 1998:267n30)、“no” と断定するのは早計であり “?” を付加した方が良いと思われる。

一方で、同語反復的な用法はサムアル方言とエドム語 (およびモアブ語も?) 以外の北西セム語に見られるという点で、上述の 2 つの用法とは分布が異なることがわかる。資料が少ない言語においてさえわずかずつでも用例が見られる一方で、膨大な資料を持つアラム語においては、第 3 章で見たように限られた地域において年代的にも初期にしかこの用法が見られないことは注目に値しよう。

## 5 終わりに

Garr (1985) は、不定詞絶対形の用法として命令形あるいは定動詞として使われる場合について、前 1 千年紀前半の北西セム語の用例を収集してその結果をまとめたものとして、大変有益である。表 1 によれば、上述の用法はかなり限られた言語において見られる用法であることがわかる。

一方で、Garr が扱っていない用法として、聖書ヘブライ語によく見られる同語反復的な不定詞絶対形の用例を、Garr が扱ったのと同じ言語において本稿において整理し検討した。その結果、この用法は、サムアル方言とエドム語 (モアブ語については議論あり) を除く北西セム諸語に見られ、命令形および定動詞として用いられる場合とは違う地域的な偏りを示すこともわかった。

以上の点から、前 1 千年紀の北西セム語の等語線の再画定のために、不定詞絶対形の同語反復的な用法は意味ある別個の項目として加えるべきであると結論づけたい。

## 【参考文献】

- Andersen, Francis I. (1966) 'Moabite syntax,' *Orientalia* 35:81-120.
- Aufrecht, Walter E. (2000) 'The Amman Citadel inscription,' in Hallo and Younger Jr. (eds.), 139.
- Donner, H. and W. Röllig (1964) *Kanaanäische und aramäische Inschriften. Band 2: Kommentar*. Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- Friedrich, Johannes - Wolfgang Röllig (1999) *Phönizisch-punische Grammatik. 3. Auflage, neu bearbeitet von Maria Giulia Amadasi Guzzo unter Mitarbeit von Werner R. Mayer* (Analecta orientalia 55). Roma: Pontificio Instituto Biblico.
- Garr, W. Randall (1985) *Dialect geography of Syria-Palestine, 1000-586 B.C.E.* Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Gibson, John C.L. (1971) *Hebrew and Moabite inscriptions* (Textbook of Syrian Semitic inscriptions 1). Oxford: Clarendon Press.
- Gibson, John C.L. (1975) *Aramaic inscriptions, including inscriptions in the dialect of Zanjirli* (Textbook of Syrian Semitic inscriptions 2). Oxford: Clarendon Press.
- Gibson, John C.L. (1982) *Phoenician inscriptions, including inscriptions in the mixed dialect of Arslan Tash* (Textbook of Syrian Semitic inscriptions 3). Oxford: Clarendon Press.
- Gogel, Sandra Landis (1998) *A grammar of epigraphic Hebrew* (Resources for biblical study 23). Atlanta, Georgia: Scholars Press.
- Hallo, William W. and K. Lawson Younger, Jr. (eds.) (2000) *Monumental inscriptions from the biblical world* (The context of Scripture 2). Leiden: Brill.
- Hoftijzer, J and G. van der Kooij (eds.) (1976) *Aramaic texts from Deir 'Alla* (Documenta et monumenta Orientis antiqui 19). Leiden: E. J. Brill.

- Jackson, Kent P. (1983) *The Ammonite language of the Iron Age* (Harvard Semitic monographs 27). Chico, California: Scholars Press.
- Joüon, Paul - T. Muraoka (2006) *A grammar of Biblical Hebrew* (Subsidia Biblica 27). Roma: Editrice Pontificio Istituto Biblio.
- KAI = Donner and Röellig, *Kanaanäische und aramäische Inschriften*.
- Krahmalkov, Charles R. (2000) *Phoenician-Punic dictionary* (Orientalia Lovaniensia analecta 90. Studia phoenicia 15), Leuven: Uitgeverij Peeters en Departement Oosterse Studies.
- Levine, Baruch A. (2000) 'The Deir 'Alla plaster inscriptions,' in Hallo and Younger Jr. (eds.), 140-145.
- McCarter, P. Kyle (2000a) 'The sacrophagus inscription of Tabnit, king of Sidon,' in Hallo and Younger Jr. (eds.), 181-182.
- McCarter, P. Kyle (2000b) 'The tomb inscription of Si'gabbar, priest of Sahar,' in Hallo and Younger Jr. (eds.), 184-185.
- Müller, Hans-Peter (1991) 'Die Sprache der Texte von Tell Deir 'Allā im Kontext der nordwestsemitischen Sprachen - mit einigen Erwägungen zum Zusammenhang der schwachen Verbklassen,' *Zeitschrift für Althebraistik* 4:1-31.
- Niccacci, Alviero (1994) 'The stele of Mesha and the Bible: verbal system and narrativity,' *Orientalia* 63:226-248.
- Schniedewind, William M. (2005) *Northwest Semitic inscriptions English translation. Version 2.1* (Accordance Bible software). Altamonte Springs, Florida: Oak Tree Software.
- Schüle, Andreas (2000) *Die Syntax der althebräischen Inschriften: ein Beitrag zur historischen Grammatik des Hebräischen* (Alter Orient und Altes Testament 270). Münster: Ugarit-Verlag.
- Segert, Stanislav (1990) *Altaramäische Grammatik: mit Bibliographie, Chrestomathie und Glossar. 4. unveränderte Auflage*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.

- Smelik, Klaas A.D. (1991) *Writings from ancient Israel: a handbook of historical and religious documents*. Edinburgh: T. & T. Clark.
- Smelik, K.A.D. (2000) 'The inscription of King Mesha,' in Hallo and Younger Jr. (eds.), 137-138.
- van der Steen, Eveline J. and Klaas A.D. Smelik (2007) 'King Mesha and the tribe of Dibon,' *Journal for the Study of the Old Testament* 32(2):139-162.
- 竹内茂夫 (2006) 「アザティワダ碑文のフェニキア語部分における非過去を表す不定詞絶対形再考」城生佰太郎博士還暦記念論文集編集委員会編『実験音声学と一般言語学—城生佰太郎博士還暦記念論文集—』東京堂出版所収、496-505.
- Tropper, Josef (1993) *Die Inschriften von Zincirli: Neue Edition und vergleichende Grammatik des phönizischen, sam'alischen und aramäischen Textkorpus* (Abhandlungen zur Literatur Alt-Syrien-Palästinas und Mesopotamiens 6). Münster: Ugarit-Verlag.
- Waltke, Bruce K. and M. O'Connor (1990) *An introduction to biblical Hebrew syntax*. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.
- Weippert, Manfred (1991) 'The Balaam text from Deir 'Allā and the study of the Old Testament,' in J. Hoftijzer and G. van der Kooij (eds.), *The Balaam text from Deir Alla re-evaluated: proceedings of the international symposium held at Leiden, 21-24 August 1989*, Leiden: E.J. Brill, 151-84.
- Williams, Ronald J. (2007) *Williams' Hebrew syntax. 3rd ed. Revised and expanded by John C. Beckman*. Toronto: University of Toronto Press.

# The Tautological Infinitive Absolute in Northwest Semitic Languages in the First Half of the First Millennium B.C.E.

Shigeo TAKEUCHI

Garr (1985) refers to the infinitive absolute used as the imperative and as finite verb in Northwest Semitic languages in the first half of the first millennium B.C.E. In this paper, the examples cited by Garr are reexamined and examples of the tautological infinitive absolute in the same set of languages are gathered so as to find that they exhibit distinct isoglosses. The revised version of Garr's table on the infinitive absolute is as follows:

	Byblian	Phoenician	Standard	Aramaic	Samalian	Ammonite	Deir Alla	Mosbite	Edomite	Hebrew
(4.7a) Infinitive: as imperative	<u>no</u>	?	no	no?		yes?	no			yes
(4.7c) Infinitive: as finite verb		yes	no	no		no	no			<u>no?</u>
<u>Tautological infinitive</u>	yes	yes	yes		yes	yes	yes?			yes

*Faculty of Cultural Studies*

*Kyoto Sangyo University*

*Motoyama, Kamigamo, Kyoto 603-8555, Japan*

*E-mail: atake@cc.kyoto-su.ac.jp*